市町村レポート

京都市

京都発「おもてなし」という心のUD

京都市長　桝本賴兼さん

右：4カ国語で表記された駒札
左：4カ国語で書かれた寺町通の由来を記載した辻標

ハードとソフトのフレキシブルな連携が京都独自のユニバーサルデザインを支える

——京都市として、ユニバーサルデザイン(UD)にどのように取り組んでこられたのでしょうか。

桝本——これまで、京都市では、だれもがバリアを感じることなく社会に参加できる「人にやさしいまち」の実現に積極的に取り組んできました。例えば、昭和47年には全国に先駆けて、障害のある人のためのまちづくりのあり方を協議する「障害者のためのモデル街づくり推進懇談会」を設立したことを皮切りに、昭和51年には建築物の整備基準を定めた「福祉のまちづくりのための建築物環境整備要綱」を、平成7年には対象を道路、公園、公共交通機関などにも拡大した「人にやさしいまちづくり要綱」を策定し、主に高齢者や障害のある人などの利用しやすさを基準に、だれもが安心して円滑に利用できる環境づくりを進めてきました。さらに、平成9年から12年にかけ、公園、建築物、道路等の分野でUDの理念を採り入れた整備を開始し、平成13年度に策定した京都市基本計画にも「ひとにやさしいまちづくり」を進める上での重要な視点としてUDを掲げるなど、その取り組みを進めてきました。

　現在の社会は、長寿化、少子化、情報化、国際化といった社会経済状況を背景に、多様な個性や価値観を持つ人がともに暮らしています。京都市も例外でなく、京都が将来にわたって活力を持ち続けるためには、これまで以上に、一人ひとりの個性や価値観が尊重される必要があります。

　このため、京都の生活文化全体に新たな視点としてUDの考え方を採り入れ、これまでの取り組みを一層進めることを目的とし、平成17年4月にUDの推進条例を施行し、同年12月に推進指針を策定しました。その推進に当たっては、①障害のある人や高齢者といった属性でとらえず、同じ地域に住み、また、歴史と文化のまち京都を訪れるすべての人にとってのさまざまな生活上の支障をなくしていくこと。②建築物や道路などのハード面だけでなく、その周辺環境や、もの、情報、サービスなどソフト面でのUDを広げていくとともに、暖かく思いやりのある心を持った「人の行動」を広げていくこと。③行政のみならず、事業者や市民などの主体的、積極的な取り組みを進めていくこと。以上3点が特に重要なポイントであると考えています。

——京都市として、UD計画でなく「指針」としたのはなぜでしょうか。

ますもと　よりかね・京都市長、世界歴史都市連名会長,（財）京都市芸術文化協会副会長。昭和16年生まれ。昭和38年中央大学法学部卒業後、京都市教育委員会事務局勤務。京都市教育委員会事務局教育次長、京都市教育委員会教育長を経て、1996年より現職。3期目。

左より：「ひと・まち交流館 京都」に設置された高さの低いカウンター／東山区役所に設置されている高さの異なる記帳台／事故を未然に防ぐ市営地下鉄東西線ホームのドア／ノンステップバス

桝本——UDは明確な数値で測れるものではないし、100%のものはないと考えています。大切なのは100%に向けた絶え間ない努力です。UDとは「終わりのない」「進化し続ける」ものですから、あえて終わりのある「計画」とはせず「指針」にしました。将来の少子長寿社会に向けても、フレキシブルに対応ができるよう随時「指針」を見直していけばいいと考えています。「指針」自体もUDというわけです。

——京都は日本を代表する観光都市で、寺院、神社をはじめとした観光の魅力も多く、外から多くの方々が訪れます。広範な人々との協力体制についてはいかがでしょうか。

桝本——条例に基づいて、本市のUD推進に関する事項について審議いただくための審議会を設置しています。委員は、学識経験者をはじめ、経済、観光、福祉、情報、宗教、外国人の方などあらゆる分野からご参加いただいており、大変熱心に議論いただき、各分野へのUDの普及推進にも大きな役割を果たしています。例えば京都工芸繊維大学の先生のご協力により、京都市内の大学の交流と連携を進める「キャンパスプラザ京都」において「実践ユニバーサルデザイン」という授業を行っています。毎回週替わりで、各分野の専門家の方々が講師として授業を行うところに特色があり、京都市内のさまざまな大学生の皆さんが受講しています。京都市もこの講師の一役を担っております。

——京都市では、建築物をはじめ、さまざまな基準を作成してまちづくりに取り組んでこられたということですが、それらを進める上で大切なことは何だとお考えですか。

桝本——例えば、「ハートビル法」の改正を受けて、京都市では「建築物等のバリアフリーの促進に関する条例」を制定しました。この条例では、さまざまな方々が利用しやすい建物の基準を詳細に規定していますが、その基準は国の基準より厳しいものになっています。

　また、道路の段差については、視覚障害のある人にとっての目印と車いす利用者にとっての障害という2つの視点から「2センチ」という基準を国が設けていますが、車いすの方にヒアリングをすると2センチがとてもきついという意見がありましたので、1センチにしています。このように建物などのハード面に関しては既に基準があるため問題はないですが、基準のない建築物における案内サインの工夫は大切だと思います。サインはその建築物に初めて接する方が目的地へ容易にアクセスできるためのもので、ソフト面をしっかりと考えて設置しないとUDとして十分なものとはいえません。

「おもてなし」の心は住んでいる市民の生活も明るく楽しく活性化させる「ソフト」

——京都市のホームページは視覚・色覚障害をはじめ、さまざまな方々に対応できるようになっていますが、観光案内のUDについてはどのような取り組みを進めているのですか。

桝本——京都市は世界有数の観光都市であり、UDを考える上で、「観光」というキーワードは大変重みを持っています。観光客にとって「訪ねてよし」のまちは、京都市民にとっても「住んでよし」のまちであると思うのです。このため、さまざまな工夫をしていますが、そのひとつが観光案内のサインです。海外からの観光客や居住者が多いため、市内各所に設置している観光案内図板や名所旧跡に設置した「駒札」は基本的に日本語、英語、中国語、ハングルの4カ国語で表記するようにしています。観光情報提供も、ホームページ「京都市観光文化情報システム」において、日本語、英語、中国語、ハングルの4カ国語で発信を行うほか、京都外国語大学と提携して6カ国語での情報発信の研究も進めています。

左より：外国の方にも分かりやすいように駅名のナンバリング表示をしている／車いすやベビーカーが簡単に入れるように工夫された二条公園の車止め／携帯電話から、交通手段や観光施設の由来等の情報ページに簡単にアクセスできるQRコード／文字拡大、配色変更、音声読上機能等、アクセシビリティに配慮した京都市のホームページ

——「おもてなし」といういわば「心のUD」には情報以外のソフト面での対応も必要だと思います。

桝本——京都商工会議所が「京都検定」を創設しましたが、京都市としても、京都へ来られた方々を市民が「おもてなし」できるよう、合格者を起用した観光ボランティアの育成に取り組んでいます。おかげさまで、大変多くの方に受験いただき、地元の放送局では京都検定を特集したクイズ番組なども放映しています。

また、11月からは、次代を担う子どもたちのために市民ぐるみで取り組む「歴史都市・京都から学ぶジュニア日本文化検定（ジュニア京都検定）」が始まります。子どもたちが自身の住んでいるまちをもっと好きになり、さらに京都に来た修学旅行生や観光客に、日本の文化、伝統、心を伝えられればと思います。来年には最終合格者を「ジュニア京都観光大使」に任命したいと考えています。まず子どもたちが自分たちのまちを知り、子どもの学びの場を創出することで大人たちが互いの結びつきを深める。そうしたことがUDのまちづくりにつながっていくと考えています。

——この他にも何か新しい工夫はありますか。

桝本——例えば、地下鉄の案内は、今までも駅名をアルファベットで表記していますが、新たに「駅ナンバリング表記」を導入しました。東西線なら「T01番駅」「T02番駅」といった具合です。これにより、目的駅、降車駅や乗換え駅までの駅数、車両の進行方向などが容易に確認でき、特に駅名に不案内な外国からお越しの方々や初めて市営地下鉄をご利用になるお客様は気軽に安心してご乗車いただけます。

また、市バスでは、携帯型バスロケーションシステムを導入しています。「ポケット・バスロケ（ポケロケ）」は、現在のバスロケーションシステムと同様に、数停留所手前からのバス接近情報をお知らせするもので、市バス停留所・バス系統・行先を選択すると、検索時点での市バスの接近情報が携帯電話等の画面に表示されます。携帯電話は今や視覚に障害のある方にとって不可欠なものですが、このシステムは、障害のある方はもとより、障害のない方の外出支援という意味でも大きな効果があります。

この他、QRコードを活用した「京都観光ケータイ情報サービス」を展開しています。このサービスは、散策中の観光客や市民の皆様が、市バス停留所の観光案内図板などに表示した2次元バーコードを対応機種の携帯電話で読み取り、関係サイトにアクセスすることにより、観光施設や市バス情報などの「豊富な」情報を「その場で」「簡単に」入手することができるものです。

——新しい路面電車の検討も行っているようですね。

桝本——人と環境にやさしいまちづくりの視点から検討を始めました。特に、土日には車で来られる観光客も多く、渋滞が発生するなど、地元にお住まいの方をはじめ皆さんが移動しにくい状況となるのです。その解決のひとつの方策として、ヨーロッパの事例も参考としながら、LRT（次世代型路面電車システム）をはじめとする新しい公共交通システムの検討を行っています。現在、検討を進めるためのモデルとして選んだ北野白梅町から出町柳を結ぶ今出川線沿線を中心に、地域にお住まいの方との意見交換会を開催し、交通社会実験の実施に向けた検討を行っているところです。先日の新聞にも掲載されていましたが、国土交通省がLRTを今後の都市の交通機関として評価し、導入の支援に本腰を入れるという動きもあります。LRTは、お年寄りや障害のある方などにもやさしい乗り物です。こういったメリットもありますが、導入に向けては、自動車交通にあたえる影響や採算性の問題などの課題も多くありますので、市民の皆さんの意見も聞きながら、検討を進めていこうと考えています。

左より：素焼きの陶器に漆を塗り重ねた陶胎漆器。縁に丸みをつけることで、持ちやすく、運びやすい形になっている／景観や歩きやすさに配慮して電線類を地中化した祇園花見小路通／東山区役所の2段手すりの階段／少ない段差を望む車いす利用者と、段差を目印にする視覚障害のある人双方にとって通行しやすいよう、段差を1センチに調整した

古いものこそ新しい京都のダイナミズムの中に息づく新たな「京都発UD」

——伝統工芸の支援などについてはいかがでしょうか。

桝本——京都漆器青年会という組織がありまして、京漆器に関わっている青年の皆さんが実験的な試みをしており、京都市産業技術研究所と連携し、UDを題材に漆器の開発実験に取り組みました。実際に握ってもらったデータをもとにつくるプラスチックの食器などはすでにありますが、これは伝統的な京漆器をそのまま活用するものですからデザイン的なことも加味しながら取り組みを進めています。

例えば、子どもさんやお年寄りは器の中の食べ物を最後まですくい切れないことがままありますが、縁にくぼみをつけるようにしてその問題を解決するなど、いろいろな試みを行いました。本格的な漆器でUDを考えたものは、なかなかないと思います。この他、日本のUDとして、着物、扇子や風呂敷がよく実例に挙がりますが、京都の伝統産業である着物、京扇子や風呂敷はその意味ではそのままでUDといえるかもしれません。

——京都らしい町家の街並みがだいぶ少なくなっているようですが。

桝本——残ってはいるのですが、ほとんどが高齢者世帯で、耐震上の問題も抱えています。耐震補強工事にはかなりの費用がかかりますし、伝統的な京町家を補修することのできる職人さんがいなくなってきているという問題もあります。市では京町家を保全・再生・活用するため、(財)京都市景観・まちづくりセンターに京町家まちづくりファンドを設立し、京町家の改修に助成をしていくこととしていますが、実際は借家も多く、複雑な利害関係もあります。現在、京町家の保全・再生・活用に向けて新しい計画をつくるべく、市民活動団体等の方々とともに検討を進めているところで、今年度中に案をまとめていきたいと考えています。京町家にお住まいの方々の中にも京町家のことをよくご存知ではない方もいらっしゃいますから、まずは京町家の何たるかを理解していただくことから始めて、それに携わる技術を持つ人の育成もサポートしていきます。

京町家の中には福祉施設に転換する例もあります。小規模多機能施設という介護保険の施設です。民間事業者の設置に市が補助金を出し、昔ながらの構造を持つ京町家を、地域の顔見知りの高齢者に総合的なサービスを提供する施設にするのです。デイサービスもショートステイもヘルパー派遣もここで行います。京町家に住んでいた高齢者も安心して訪れることができる良さがありますし、京都ならではの試みです。

——最後に、国際会議の意義と今後の抱負をお聞かせ下さい。

桝本——これまで条例や指針づくりを進めてきましたが、市民の皆さんにUDを知っていただくことが当面の課題であると考えています。この会議をきっかけに京都ならではのUDを発信すると同時に、多くの方に世界のUDを体験していただき、UDに興味を持ってほしいと願っています。また、伝統と歴史のある京都で行われるという点でも、今回の会議は特別な意義のあるものです。

京都市もIAUDと府との共催で、国内外からのUD研究者をお招きした無料の一般向け公開シンポジウムを行います。また展示コーナーでは企業の最先端のUDに対する試みも実際に見ることができますし、まだUDを知らない方にとっては初めてUDに触れる恰好の機会になると思います。展示会場の一角では「京都コーナー」を設置し、京都の企業や大学、NPOなどの取り組みを紹介し、地元発信のシンポジウムも積極的に開催したいと思います。より多くの方がご来場されることを願っています。

市町村レポート

八幡市

教育の「かたち」と「きもち」のリ・デザイン（再企画）で、子どもたちの人間力（にんげんりき）を育てる ―学校UD化構想―

子どもが主体的に、豊かな人間力を身に付られる学校をつくることを目的に策定された学校UD化構想

地域で支える子どもたちの幸せ

八幡市は京都府の南西部、木津川、宇治川、桂川が合流し淀川となる地点に位置する。石清水八幡宮の門前町、松花堂弁当発祥の地としても知られている。

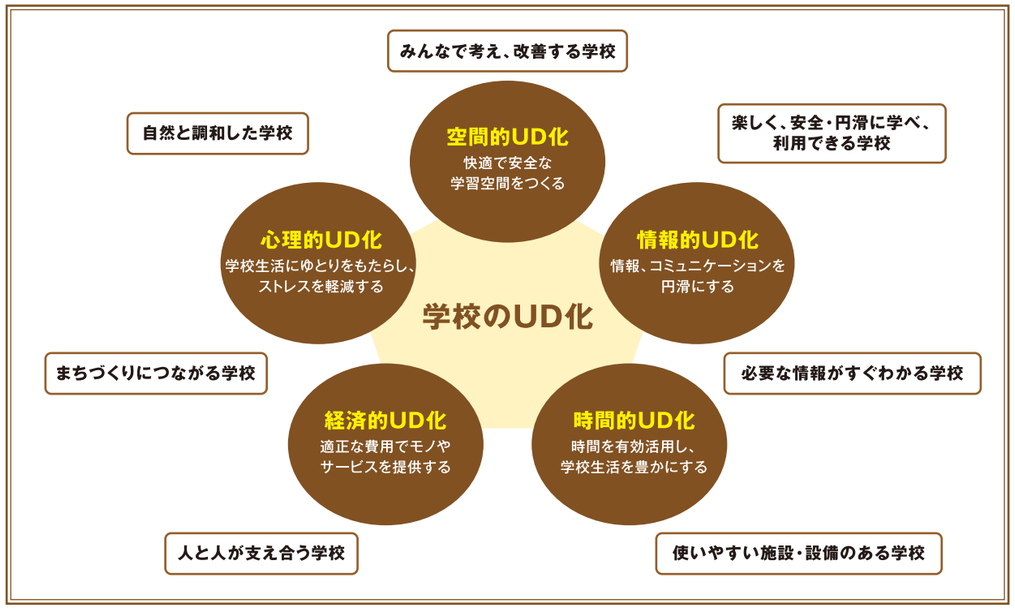
昭和30年代からは京都、大阪の2大都市圏のベッドタウン化し、昭和40年代後半には都市基盤整備公団による大規模団地の開発で人口が急増したが、1993年1月をピークに、人口は漸減していく。市内の小中学校においても児童生徒数が減少し、学級数がピーク時の1／3になった学校もある。地域によるアンバランスを是正し、教育の質を高めるためにも学校再編計画が必要になった。

八幡市では、これを機に教育の原点を見据えた学校改革を行うことになった。「子どもが〝人〟になるためには、大人たちが見守り、支えていくことが不可欠です。学校、家庭、地域が役割と責任を自覚し、連携していかなければなりません。幸いなことに八幡市には地域のつながりが残っていますから、歴史や伝統、人的ネットワークなどの社会的資源を活かすことが重要」と八幡市教育委員会教育長の今井興治さん。学校改革は、次世代を担う子どもたちを育てるために地域社会の意識や仕組みを変えていくことでもある。

200人の市民の声を反映し学校のあるべき姿を示す

学校再編計画にあたり、市では教育長の今井さんをトップにしたプロジェクトチームを結成。200人以上の市民が議論をし、そのプロセスの中から将来像を創り上げていった。

2004年度には、公募を含めた市民代表による「やわたの学校改革に関する市民委員会」を設置し、新しい学校の基本的なあり方を議論してもらった。同時に子ども5244人と保護者2829人を対象にした学校満足度調査を実施。2005年度からは、学識経験者や市民代表による「八幡市学校改革懇話会」で、専門的かつ幅広い視点から学校改革のあり方に関する提言を得た。これらの意見をもとに誕生したのが「八幡市学校UD化構想」だ。



八幡市学校UD化の視点。八幡市教育委員会発行「くすのき」（2005年11月25日）をもとに構成

次世代を担う子どもたち。夏休みも元気に部活に励む中学生（男山東中学校）

目標は「自分をつくり八幡をつくる子ども」たちを育むため、ユニバーサルデザインの視点に立った学校教育を実現することだ。一人ひとりの個性やニーズを尊重し、身近にある当たり前のものを見直し、改善を重ねることにより、すべての人にとって暮らしやすい環境をつくっていこうというユニバーサルデザインの視点は、子どもたちの個性や共生の心をはぐくむ学校教育においても大切な視点だ。

「学校UD化構想」を策定した市教育部学校教育課の林幸光さんは、「子どもたちが主体的に、豊かな人間力を身に付けられるように学校UD化構想を通して、教育のリ・デザイン（再企画）を進めていきたい」という。さらに「現場の先生方はさまざまな創意工夫をしています。それらのノウハウを活かし、蓄積させていくことで市全体の教育の質が高まる。そのためにリ・デザイン（再企画）が必要なのです」と力を込める。

100万円の予算でどんな教育を受けたいか

八幡市では、毎年、市内の児童生徒が身近なテーマを選び市長に提案を行う「子ども会議」を開催している。自由で柔軟な発想やしっかりした考え方に子どもたちの無限の可能性を感じると林さん。

1879年にエジソンが白熱電球を発明した時に使われたフィラメントは石清水八幡宮境内の竹だった

今年は「よりよい学校をつくるためには…100万円あったら」というテーマで市内17校の代表児童・生徒36人のメンバーが集まり、熱い議論を交わしている。第1回目の会議では、ファイナンシャルプランナーからお金の役割や経済の仕組みなどを学んだ。今後は、自分たちがどのような教育を受けたいか、そのためにお金はどのように使うべきかを話し合っていく。最優秀案を出したグループには、サプライズがあるかもしれない。

先生のための危機管理の研修プログラム

学校崩壊、暴力、キレる子どもたち…。日本中の教育の現場が抱えている課題だ。2001年に大阪府池田市や宇治市で起きた事件の後から、八幡市は、安全・安心で快適な学校づくりの一環として、市立小中学校の教職員を対象にした危機管理スキルの研修プログラムを実施している。教職員の問題解決能力を向上させ、学校に危機管理システムを構築することが目的だ。

「八幡市子ども会議」。今年は「よりよい学校をつくるためには‥100万円あったら」というテーマで市内17校の小中学校、高校の代表児童生徒36人のメンバーが集まり、議論する

12時間のプログラムは、基本的な危機介入モデルの紹介から始まり、生徒指導を想定したロールプレイで、子どもや保護者への接し方、自分自身の感情のコントロール方法などを研修する。参加した先生たちからは実践的な内容で参考になると好評だ。現在、市立小中学校には危機予防研究所（CPI、Crisis Prevention Institute. Inc.）認定インストラクターの資格をもつ教職員が17名いる。

携帯電話のメールを利用した情報配信システム

危機管理のひとつに情報伝達がある。緊急時には、児童生徒の安全に関する情報を的確に伝達することが必要だ。日頃から学校と保護者の連絡を密にして、いざという時に機能するよう備えることも危機管理のひとつだといえる。

市内の小中学校15校では、携帯電話を使った学校情報配信システムを実施している。学校から保護者の携帯メールに一斉配信するもの。事前に配信希望者が学校のホームページにアクセスして登録する。保護者だけでなく地域の人も登録できるシステムだ。

事件や災害発生時などの緊急連絡のほか、修学旅行や参観日などの学校行事についても配信される。日頃から利用することで、緊急時にも正確で迅速な情報伝達が可能になる。

小中学校の先生を対象にした危機管理の研修プログラム

ゲーム感覚で勉強できる学習教材

学力向上は学校教育の中でも大きな課題だ。しかし、多様な子どもたちに一律の方法で教え、学力を向上させるのは容易なことではない。まずは子どもたちのやる気を伸ばし、自主的に学ぶ楽しさを気付かせることが早道だ。勉強は嫌いでもゲームや遊びは好きなのが子ども。そこに着目し、人気のゲーム機「ニンテンドーDS」を使った学習ソフトがある。見て・聞いて・書いて覚えるシンプルで楽しい英単語トレーニングソフトは、いつでも、どこでも好きなときに学べるユニバーサルデザインの学習ツールだといえる。

市立小学校の教諭が開発した「百マス夫さんII」はたし算・ひき算・かけ算・わり算のネットランキング対応100マス計算ソフトだ。誰もが無料でダウンロードでき、計算タイムに応じて級や段の認定があり、認定証も発行される。ネットランキングに簡単に参加でき、全国順位がすぐ分かる。計算が苦手な場合には25マス計算からトライできる。市内の小中学生も楽しみながら参加しているという。今後はインターネットやゲーム機を使った学習教材ソフトも増えていくことだろう。

ゲーム機やインターネットを使った学習ソフト。ゲーム感覚で学べ、興味や能力に応じてさまざまな使い方ができるユニバーサルな学習ツール

学びのUD化

一人ひとりの学び方や能力の多様性を知り、それらをうまく使いこなせれば、学び方をよりよくすることができる。
また誰でも何らかの得意なものは持っていて、それらを活用することでよりよく学べるようになる。

- ことばが得意
- 数学が得意
- 絵が得意
- 体を使うのが得意
- 音楽が得意
- 人と接するのが得意
- 自分のことが得意
- 自然が得意

＋

- 見たり、聞いたり、読んだりするタイプ
- じっくり考えるタイプ
- 動くことによって学ぶタイプ
- 感情や直感的なものを優先して学ぶタイプ
- 話すことで学ぶタイプ

＝

- 誰もが学んでいて、学び方、速さや動機が違う
- 不安がなく、楽しい
- 積極的に参加できる
- 意味のある身近な内容、中身を扱う
- 選択できる
- 十分な時間がある
- 協力し合える
- 振り返りとフィードバックがある
- 互いにたたえ合い、教える機会がある

子どもの多様性と学びのUD化。八幡市教育委員会発行「くすのき」（2005年11月25日）をもとに構成